

①地震発生＝弾性反跳理論。

臨界震源は極大圧力下で辛うじて滑り停止中、**震源物質破壊**で圧力緩和発生で地震層滑走開始、数日かけて秒速数 m 最高速度到達時点で衝突停止、その時の大衝撃が地震。

地震電磁物性理論

②超高压下で最密充填で全物質金属化＝表面ピカピカは電子析出<物性物理学定理>、さらに超高压化震源物質では遠方地表に電子放出。超高压対応では最密充填**正電荷原子間**の斥力増大が効果、だから**逆にこの空間に電子侵入は斥力緩和=圧力緩和物質破壊になる**、これが地震兵器 HAARP の根源原理。綱引き一部破綻は全部破綻へ進行する類似を想定。臨界震源下では**弱い電子密度波進入-部分破壊**でも**連鎖反応時間経過**で全部破綻へ進行。

地震直前予知原理

③臨界震源極大圧力下では**震源物質は電子放出**で地表が負帯電、静電誘導電離層は正帯電。一転震源物質破壊で圧力緩和滑走開始になると地表電子が震源回帰、地表正帯電、静電誘導で**電離層電子増大！**。電離層は鏡に成り FM 波異常反射発生、これが**地震直前予知原理**。

**地震解析ラボ**はこの原理でビジネス開始、地震直前情報購入ユーザがいる

電磁地震兵器：

④VHF 波平面波ビーム電界で電離層電子の振動運動が可能。重い正電荷イオンは動かない。特別に**プラズマ共振原理**を使うと 200V/m 程度の最小電界で**最大振動可能**<電子は光速運動>。この電荷密度交流変動は**電荷密度波**を地上照射、震源に当たると圧力緩和地震開始に作用。

地震兵器刑事告発に向けた定量理論！！

⑤今回報告の特異事情＝**刑事告発証拠能力**としての定量理論。

現状報告書が技術的 100%完璧と言わないが、本質的を外してないと宣言できます。

(1)地震直前電離層電子増大は震源圧力緩和に伴う震源電子回帰量に対応( $10^{11} \sim 10^{14}/m^3$ )。

逆に臨界震源へのこの強度の電荷密度波照射は地震開始に作用する。

\*震源圧力緩和は密度でなく**電子総量**と言うだろうが、**部分震源破壊**でも最終的全破壊②。

(2)プラズマ共振最大振幅  $x$  は入射波長  $\lambda/4 > 1m$  になり、変動電荷量～電離層電子数密度。

故に**地上放射電荷密度波強度**は電離層電子密度に対応( $10^{11} \sim 10^{14}/m^3$ )。

(3)各種正帰還原理での弱電荷密度補強の要素。

(a)極大緊張下震源の**部分小破壊**が**近傍破綻連鎖反応**で**大局破壊へ進行の原理**。

非プラズマ共振状態での弱電荷密度波照射でも**長時間累積**が効果する。

破壊開始では電離層電子濃度上昇でプラズマ共振状態へ移行！！、

(b)**変調波＝2.5Hz 地球周回共振の原理**。

これも正帰還増強に作用する。

## HAARP 核心部要約(本報告書の構成)

2018/04/11, 13\*

### 0 部 : HAARP 核心部要約

4/13\*訂正箇所 : 振幅速度動作 $\langle V^* = (4A/T) \rangle$ .

基礎的な概念を概観する。今回目的は電磁地震兵器の**定量的根拠**の提示！。

電磁地震兵器原理は爆発力でなく、電荷密度波での震源物質化学結合破壊。

### I 部:純力学部-プラズマ定常振動相対論粗雑近似解.

<http://www.777true.net/HAARP-Part1.pdf>

相対論力学が必要化。電離層プラズマ振動での**電子衝突運動量損失=外力(HAARP)電界**で振動振幅 **A 非相対論計算**すると振幅速度動作 $\langle V = (A/(T/4)) \rangle$ は光速 **c** を超える矛盾になる。電離層プラズマ振動は摩擦損失小の大振幅振動になる結果、バネ電界強度 **E** も大！. その結果、電子運動相対論効果=**電子質量増大**が起こる光速に接近。**速度変化は矩形波化**、振幅は三角波に近い。

### II 部:熱散逸項(振幅推定) 分子衝突運動エネ損失=外力エネ入力.

<http://www.777true.net/HAARP-Part2.pdf>

地上基地から電離層に平面波ビームを精密制御照射(HAARP)で電離層電荷密度を交流変動させ、地上方向照射の電荷密度波放射器に仕立てる。**その電荷密度波強度は電離層電子密度程度になる。**

**プラズマ振動振幅**を決定するのは基礎運動方程式中の以下の熱散逸過程が平衡した場合。

**電子イオン衝突-運動量消滅項=外部励振力項.**

振幅計算では **I 部 : 速度変化の矩形波化と電子質量増大**が重要になる。

共振状態プラズマ振動の振幅は励振波の波長  $\lambda/4^*$ 程度であり、その結果再放射される震源照射の**電荷密度波強度は電離層電子密度程度になる。**

### III 部 : 電子密度侵入と震源圧力緩和 定量推計 :

2018/04/1,2,3,11

<http://www.777true.net/HAARP-Part3.pdf>

HAARP 核心は電離層電子密度で電荷密度波での震源照射する訳だが、その**強度**で震源破壊可能かどうかの定量推計、非常に粗い推計だが数値オーダーで合致できる可能性を示せる。その判り易い根拠は、最大強度圧力にあった震源が震源機械的崩壊で一変して圧力緩和にて地震滑り開始の臨界震源では過去に放出した電子が震源回帰、その結果地表は正電荷帯電、それは静電誘導で電離層電子増大に作用、これ関わる電荷量はみな同量である。

**震源圧力緩和電子量=電離層電子増大量( $10^{11} \sim 10^{13}/m^3$ )~HAARP 照射電荷密度=震源破壊**

\*電離層電子密度 **Ne** 希薄でも長時間照射量での震源圧力緩和→**Ne** 増大可能性もある。

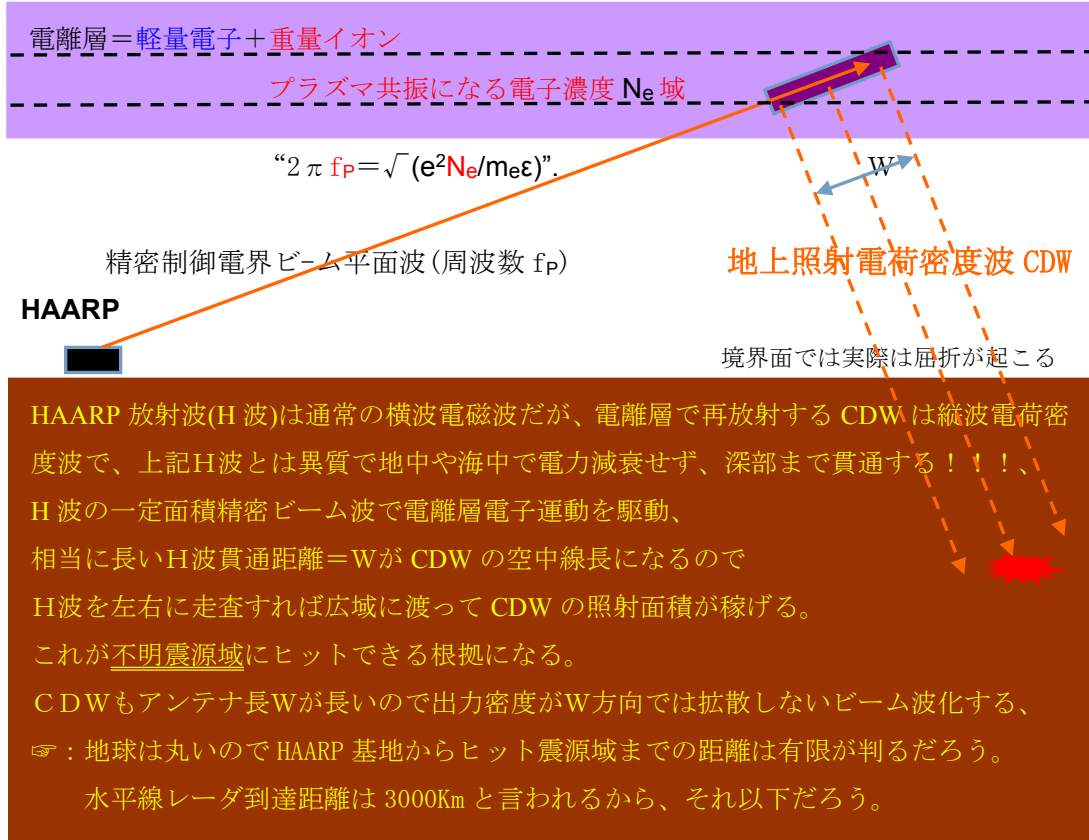
\***2.5Hz** 地球周回共振法での強度増大法の可能性もある。

\***VHF** 電離層照射レーダの電離層**励振電界強度  $E_H = 200V/m(28MHz)$** は電子光速加速でプラズマ**共振最大振幅を得る最小電界**が推計された。これ以上の電界強度は無意味、もし非共振ならば**3.4**桁上の電界強度になり、その時の電力出力は面積にもよるが**100MW**以上。

0部：HAARP 核心部要約：

2018/03/30,4/11

地震兵器 HAARP は爆発力でなく電荷密度波 CDW の臨界震源照射での**化学結合破壊(爆縮)**で**地震滑り出し開始!**、**軽量の電離層電子**を地上放射電波で精密制御(プラズマ振動共振)する事で地上照射の CDW 再放射が可能。HAARP 構成要素は既存の電子通信回路技術。



①電磁場の Maxwell 方程式.

$\square \phi = -\rho / \epsilon$  .  $\rightarrow$   $\square \mathbf{E}_1 = \text{grad}(\rho / \epsilon)$  . 本件主役{スカラ-波,電荷密度波(CDW),B波}!

$\square \mathbf{A} = -\mu \mathbf{j}$  .  $\rightarrow$   $\square \mathbf{E}_t = \mu \partial \mathbf{j} / \partial t$  . 通常の横波電磁波。

②プラズマ振動：電磁力学系最大励振目的では共振原理を利用する。

$\omega_p = \sqrt{(e^2 N_e / m_e \epsilon)}$ .....電離層電子密度  $N_e$  と共振角周波数  $\omega_p$  の関係式。



負電荷電子が詰まった仮想シート

正電荷イオンが詰まった仮想シート

両者が重なった電荷中性の本来の電離層。



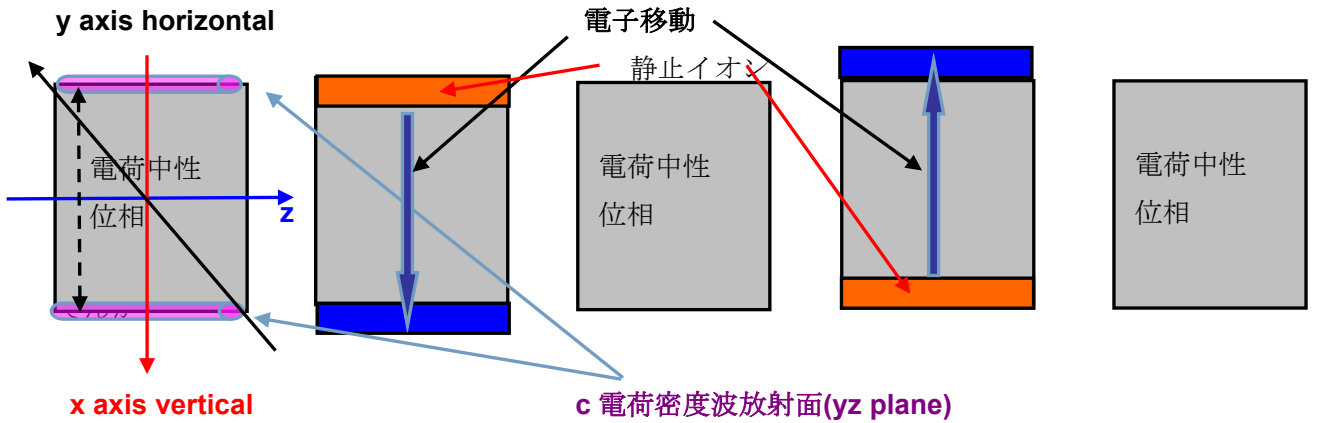
交流電界印加で軽量電子が右移動、重いイオンは不動に注意

この時に赤の正電荷部分は電子を引き戻すバネ力になる、電子重量慣性力とこのバネ力が振動運動(プラズマ振動)を形成する事が理解できればOK, 実際は電子イオン衝突に起因する摩擦相当のエネルギー損失発生が或る事にも留意、故に持続振動するには外部力が必要。

**③ flip flap sheet と電荷密度波放射<位相調整問題>。**

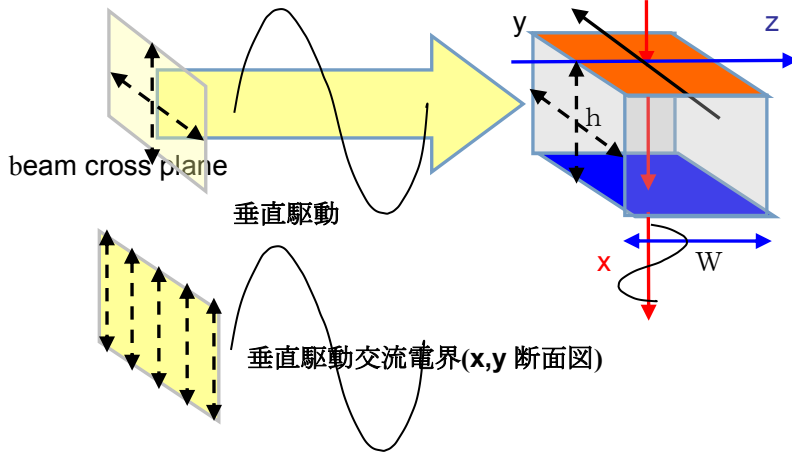
交流電界駆動入射で電離層空間の**プラズマ交流振動**で距離  $h$  の距離間隔で正電荷部と負電荷部の電荷密度波(CDW)放射部が出現<flip flap sheet=入力波照射面積= $h \times h$ >、2個の放射器波は地上到達では**同位相**でなければ無意味、この条件と  $h \times h$ =照射面積で入射波が**ビ-ム平面波**になる条件⑤も同時に満たす必要から設計パラメタ  $h$  が決定。

**flip flap sheet in one cycle(left to right)**



x axis vertical

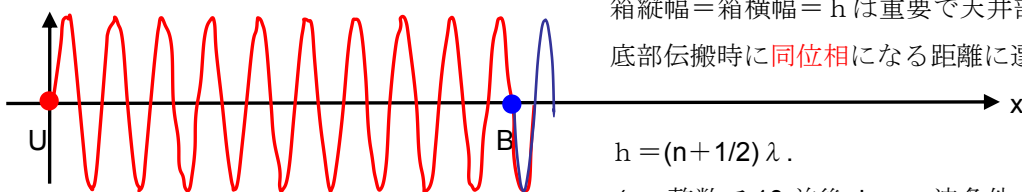
c 電荷密度波放射面(yz plane)



箱の天井Uと底面Bが電荷密度波放射面、その部分から地上(宇宙)方向に放射伝搬する。  
箱縦幅=箱横幅=  $h$  は重要で、天井部放射波が底部伝搬時に**同位相**になる距離に選ばれる。  
 $h = (n + 1/2) \lambda$  .( $n$ =整数で 10 前後<beam 波条件>)

箱横幅  $W$  は駆動入射波の走行距離で図とは異なり、圧倒的に長い、

**天井(U)-底(B)位相合致条件：**



箱縦幅=箱横幅=  $h$  は重要で天井部放射波が底部伝搬時に**同位相**になる距離に選ばれる。

$h = (n + 1/2) \lambda$  .  
.( $n$ =整数で 10 前後<beam 波条件>)

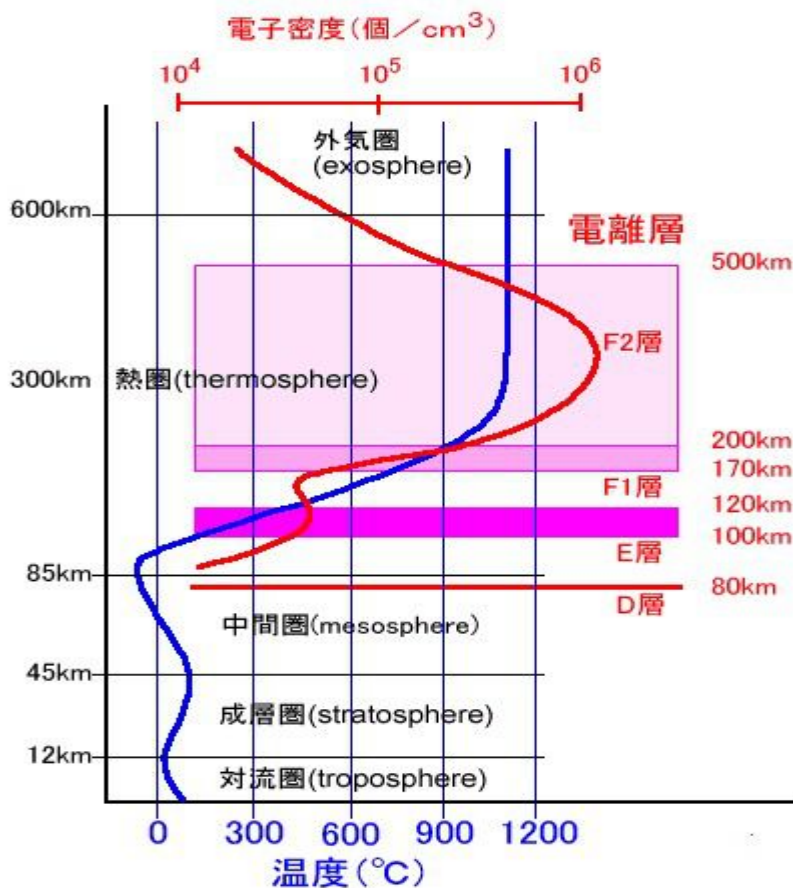
## APPENDIX1:The Resonance Frequency

$N_e$		$f_p = 9\sqrt{N_e}$	$\lambda_p/2$	$G \equiv N_e \lambda_p/2$
$10^{10}/m^3$	$10^4/cm^3$	0.9MHz	333m	$3.3 \times 10^{12}/cm^2$
$10^{11}/m^3$	$10^5/cm^3$	2.8MHz	52.3m	$5.2 \times 10^{12}/cm^2$
$10^{12}/m^3$	$10^6/cm^3$	9MHz	16.7m	$1.6 \times 10^{13}/cm^2$
$10^{13}/m^3$	$10^7/cm^3$	28MHz	5.2m	$5.2 \times 10^{13}/cm^2$

### ④電離層電子密度分布

<http://www.geocities.jp/hiroyuki0620785/intercomp/wireless/ionosphere.htm>

以下の電子密度は平均値と思われ、現実には大きく変動してるらしいです。



t

高い周波数(20MHz 帯)でもプラズマ共振に持ち込める理由。

F2層={ $10^6/cm^3$ ;9MHz}が一番電子密度が高いが、周波数 9MHz は低いので大型施設になる、小型化を目指すとは $10^7/cm^3$ ; 28MHz}。だが対応する電子密度が上図では無い事になる。

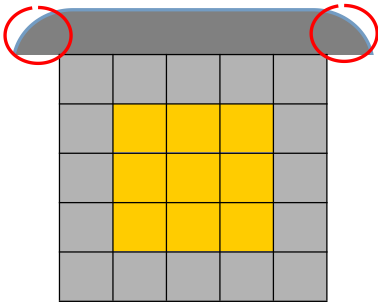
さて地震開始になると電離層電子密度は上がるので、28MHz でも共振電子密度= $10^7/cm$  が起きる、非共振で CDW を形成、震源照射で震源圧力緩和を誘導し、それで電離層電子密度を上げるといつかは共振濃度に達することになる。

⑤ビーム平面波化条件=伝播経過中の有限平面波ビーム周囲端からの電力漏れ推計。

HAARP = 電荷密度波地震兵器の理論推計 : 2016/5/30,6/1,2,4,5.

[http://www.777true.net/the-convergence-to-genuine\\_J53-HAARP-Evidences-of-the-Mechanism.pdf](http://www.777true.net/the-convergence-to-genuine_J53-HAARP-Evidences-of-the-Mechanism.pdf)

.位相整列アンテナからのビーム平面伝播波が 300Km,3000Km の標的電離層照射時に伝播電力損失を起してないかの問題は**非常に粗い推計**ではほぼ問題なし。強電界が実現出来る。



アンテナ単位が  $N = 18 \times 18$  個で周囲アンテナ  $M = 17 \times 4$  個として、周辺アンテナ一個(灰色)だけが単位時間に 1/2 の電力損と推計、周辺近傍が徐々に進行方向とはずれる波面形成に参与してる。

電力損失比率  $\xi = 0.5 \times (17 \times 4 / 18 \times 18) \times (\text{伝播距離} / \text{光速})$   
 $= 0.5 \times (68 / 324) \times (3000 \text{Km} / 3 \times 10^8 \text{m/s}) \sim 1 \times 10^{-3}$ .  
 0.1%に。電界強度も 0.05%の減衰。

電磁場は波長  $\lambda (= c/f)$  に関して相似性が成立するので  $\lambda = 1 \text{cm}$  マイクロ波ビームが  $D = \text{数 } 10 \text{ キロ}???$ 、で波束崩れしない事から推計すると  $N = (10^4 \text{m} / 0.01 \text{m}) = 10^6$ .  
 $\lambda = 30 \text{m}$  の VHF 波では同じ意味で  $D = 30 \text{m} \times 10^6 = 30000 \text{Km}$  も飛ばせる。

### \* Wave Equation Solution by Huygens & Fresnel Principle(?).

(波)面積分による波動方程式解。

$$\square \phi = -\rho / \epsilon. \rightarrow \phi = \iiint dV \rho(\mathbf{r}'; t-R/c) / 4\pi \epsilon |\mathbf{r}-\mathbf{r}'|. \quad \langle R = |\mathbf{r}-\mathbf{r}'| \rangle$$

$$\square \phi = 0. \rightarrow \phi = \iint dS. \text{grad} \phi(\mathbf{r}'; t-R/c) / 4\pi |\mathbf{r}-\mathbf{r}'|.$$

$$\square \mathbf{A} = -\mu \mathbf{j}. \rightarrow \mathbf{A} = \iiint dV \mu \mathbf{j}(\mathbf{r}'; t-R/c) / 4\pi |\mathbf{r}-\mathbf{r}'|.$$

$$\square \mathbf{A} = 0. \rightarrow \mathbf{A} = \iint dS \times \text{curl} \mathbf{A}(\mathbf{r}'; t-R/c) / 4\pi |\mathbf{r}-\mathbf{r}'|.$$

最終式が横波電磁波の波面拡散を記述するだろう。

進行方向では素波源が**同一位相的**に寄与、進行方向外れ、究極が波面並行方向だが、ここでは素波源の位相が連続的にずれて加算されて相殺可能に出来る設計配置にすれば電界強度は上がりにくい。

\*VHF 地平線レーダ ( $D = 3000 \text{Km}?$ )。

地球円周を電波は 1sec で 7.5 回周回できるから、地球円周  $= 3 \times 10^8 \text{m} / 7.5 = 40 \times 10^6 \text{m}$

$$\xi = 0.5 \times (68 / 324) \times (3 \times 10^6 \text{m} / 3 \times 10^8 \text{m/s}) \sim 1 \times 10^{-3}.$$

地球 1/12 周回でも電界強度減衰 0.05%。



## ⑥化学反応時間&力学反応時間に対応する超低周波(ELF波)生成方法。

無線周波数と比較して化学反応や力学運動反応は圧倒的に低周波である。然るにそれに対応する低周波発生法が以下。以下では入射電荷密度波に対する整流検波相似でヘテロダイン周波数変換(ELF発生)が起きる事を推計する。常識として無理のない推論と思える。

$$(1)R(t)=\sin(2\pi ft)\cos(2\pi\Delta ft).\{=\frac{1}{\sqrt{2}}\{\sin(2\pi\langle f+\Delta f\rangle t)+\sin(2\pi\langle f-\Delta f\rangle t)\}.$$

超低周波 $\Delta f$ で変調された無線周波 $R(t)$ をプラズマ振動 $x(t)$ 駆動力とする。プラズマ運動方程式変異振幅は駆動力振幅 $\cos(2\pi\Delta ft)$ に対して厳密には線形でないが、**疑似線形**とみなせる。

(2)地球一周共振周波数条件 $\Delta f$ ( $R_E$ =地球半径： $\epsilon_r$ =岩石(Si)比誘電率 $\sim 9$ )。

$$\lambda=2\pi R_E. \quad \lambda=\lambda_0/\sqrt{\epsilon_r}. \quad \lambda_0=c_0/\Delta f.$$

$$\Delta f=c_0/\lambda_0=c_0/\lambda\sqrt{\epsilon_r}=(c_0/2\pi R_E)/\sqrt{\epsilon_r}=(7.5)/\sqrt{\epsilon_r}=(7.5)/\sqrt{9}=2.5\text{Hz}.$$

☞:3/11ではHAARPモニターで**2.4Hz**が観測されたのYouTubeがある、

## (3)ヘテロダイン検波と超低周波(ELF波)の生成方法。

-超高压下震源物質への入射**正負**電荷密度場に対する応答の違い<定性的推測>-

(a)超高压下震源物質の電気特性、

地震すべり開始前では震源は超高压最大にある、その結果、地表に電子集結。

I：震源内部電子が震源から遠隔放出されて<既成理論にはない>、

あらゆる物質は高压極限で金属化する→**金属最密充填**

最密充填金属では三角波的周期ポテンシャルの結果、バンド理論が成立。

**金属表面に自由電子浮上。**最密充填を更に超高压圧縮すると周期ポテンシャル

山谷が平坦化し自由電子化が起きる。→ **電子の遠隔放出**<現状仮説だが状況証拠!>

II：地表に電子集結<同種電荷はその斥力で表面集結、更に相互距離を離そうとする>。

(b)**正**電荷密度場入射。

基本的に震源物質は正電荷過剰的であり(I)、入射波は排斥されるだろう。

(c)**負**電荷密度場入射。

震源物質の正電荷過剰を負電荷入力の一部吸収相殺する結果、

超高压=短距離間正電荷斥力

短距離間正電荷斥力緩和=**震源空間圧力緩和!!**が起こる、

→ つっかい棒が取れて地震すべり開始へ、

上記の正負電荷違い反応は一種の**検波整流効果**に等しくヘテロダイン原理としてELF発生が起こる。そのELF周波数が(2)だと電荷密度波地球周遊の**地球共振**が起きる。いっそう地震開始に加担する。

## 付録 1 : 参考資料。

(1)最前線の地震科学(基礎から最新まで総合報告).

<http://www.777true.net/>

(2)本件報告の下書き版、専門家向け、

[http://www.777true.net/the-convergence-to-genuine\\_J54-HAARP-Plasma-Oscillation-Mechanism.pdf](http://www.777true.net/the-convergence-to-genuine_J54-HAARP-Plasma-Oscillation-Mechanism.pdf)

(3)注水地震

[http://www.777true.net/the-convergence-to-genuine\\_J48-Water-Injection-Earthquake-the-Mechanism.pdf](http://www.777true.net/the-convergence-to-genuine_J48-Water-Injection-Earthquake-the-Mechanism.pdf)

(4)地震電磁気による直前予知

[http://www.777true.net/Earthquake-Prediction-by-Phenomena-of-Seismic-Electromagnetism1\\_2.pdf](http://www.777true.net/Earthquake-Prediction-by-Phenomena-of-Seismic-Electromagnetism1_2.pdf)

(5)(6)(7)(8)(9)

## 付録 2 : 地震科学基礎要約。

### ①弾性反跳理論.

*活断層とは何か？〈国土地理院〉*

簡易に要点がまとまっています。

<http://www.gsi.go.jp/bousaichiri/explanation.html>

.....  
*陸のプレートの下に1年間に数cmから10cm程度のゆっくりとした速度で沈み込んでいきますが、引きずりこまれた陸のプレートの先端部にひずみがたまり、100年~200年ぐらい経つとこのひずみの蓄積に限界がきて壊れてずれ動き、陸のプレートの先端部が跳ね返ります*

\* M7級の地震では長さ20km程度、M8級の地震では長さ80km程度の範囲にわたって地表のずれ(地表地震断層)が現れている例があります。

\*\*この時、高圧圧縮から解放された地震滑り出し直前震源には電子が回帰して地表海面は正電荷帯電、電離層電子密度は地表海面静電誘導で増大します。帯電過剰地表では火花放電も見られる時がある〈阪神大震災1995〉。カエル、蛇、鳥等やナマズは電荷検出で地震を予知して逃げ出します。洋上ではどうかです？、深海魚が浮き出る話がしばしばあります。イオン微粒子を核とする雲形成にも変化があると言わ



## ②震源層電荷暗黒穴理論;

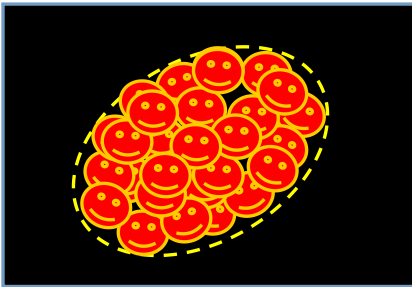
2018/03/06

以下に地震電磁気学の核心部分＝震源層電荷暗黒穴論を紹介します。

スイカを高圧圧縮すると水分析出、岩石高圧圧縮すると電子析出です。後者は岩石正帯電化に見える

が実は消える<仮想電荷中性>; **ガウス内部電荷定理**:  $Q = \oint d\mathbf{S} \cdot \mathbf{D}$

内部に正電荷が存在するのだが、表面電束  $\epsilon \mathbf{E} = \mathbf{D} = 0$  化で見えなくなる<体積圧縮効果>。



同定理は閉体積内部の電荷総量  $Q$  はその閉表面積  $S$  上の電束  $D$  測の  $dS$  面積分に一致と述べる。

ところが圧縮岩石内部では電界消滅＝電束＝定数  $0$  がきる。電界空間微分  $\text{div} \mathbf{E} = 0$  で等価。

$\text{div} \mathbf{E} = \rho / \epsilon$ . その証明が(1)以下。

固体物性研究者証言によれば**一般に物質は(極限)超高压下で金属化<最密充填格子>する**と言う。

金属特徴はその**表面層に電子浮上して表面が光-電子反射でピカピカになる**。

表面に電子析出なれば、内部では電子欠乏が起きる<電子総量不変>。

高圧圧縮震源岩石では表面を超えて地上までに**電子逃亡**が発生、それでもなお

**岩石自身は電荷中性!!**。この現象を電荷暗黒穴化<black hole>と命名します。

筆者持論は地震震源層超高压下の岩石も準金属化してその外部表面層に大規模電子放出をする<地表負帯電＝震源層電荷暗黒穴>。地震発生では震源層破壊により超高压解放が起り、**暗黒穴崩壊が地表電子を呼び戻し帰還吸収、逆に地表正帯電への変化観測に通じる。之が地震予知現象になる**。

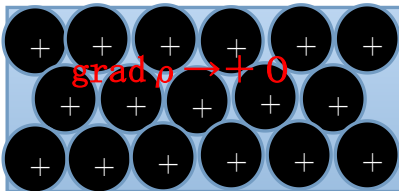
(1)道具は古典電磁気学。

$\square \phi = -\rho / \epsilon$ . Maxwell の静電 scalar potential 波動方程式、波源は電荷密度、

$\square \mathbf{A} = -\mu \mathbf{j}$ . Maxwell の vector potential 波動方程式、波源は電流密度、

$\square (-\text{grad} \phi) = \text{grad}(\rho / \epsilon) = \square \mathbf{E} = \epsilon^{-1} \text{grad} \rho$ .

(2)超高压下震源物質では原子核正電荷存在にも関わらず、つぶれで  $\text{grad} \rho \rightarrow +0$



$\square \mathbf{E} = \epsilon^{-1} \text{grad} \rho \rightarrow +0$ .

この結果、原子核+電荷多数存在にも関わらず、電界  $\mathbf{E} = 0$  で電荷が見えなくなる。

<<超高压下の電荷暗黒穴発生!!!>>

☞: **ガウス静電法則の破れ!!!**.

生真面目に電磁気論を信奉する人にすればガウス静電法則で  $Q = \oint d\mathbf{S} \cdot \mathbf{D}$ .

で内部電荷無消滅を主張するだろう。だが内部電荷はあれど表面の  $\mathbf{D} = 0$ .

☞: 電荷が見えなくなるは量子物理量になる基礎条件に反する<量子観測可能量!!!>

(3)原子核+電荷消滅は大量大規模の電子放出を伴う＝地表の負帯電化!!!。

(4) <高圧で>物資密度を上げると **静電 Coulomb Potential 項が消失** <純数学定理>.

以下に証明の引用。

(a) **Coulomb potential vanishing by increasing density** (space scale transform by  $\lambda$ ).

<http://www.777true.net/img0010-General-Analysis-on-Room-Temperature-Nuclear-Fusion.pdf>

$$H(\mathbf{r}, \mathbf{R}) = \sum_j^N [-\hbar^2 / 2m (\partial / \partial \mathbf{r}_j)^2] + \sum_k^M [-\hbar^2 / 2m (\partial / \partial \mathbf{R}_k)^2] \\ + \sum_j^N \sum_k^N [ee / 8\pi \epsilon |\mathbf{r}_j - \mathbf{r}_k|] + \sum_j^M \sum_k^M [qq / 8\pi \epsilon |\mathbf{R}_j - \mathbf{R}_k|] \\ + \sum_j^N \sum_k^M [eq / 4\pi \epsilon |\mathbf{r}_j - \mathbf{R}_k|].$$

$$H(\mathbf{r}/\lambda, \mathbf{R}/\lambda) = \sum_j^N [-\hbar^2 / 2m (\partial / \partial \lambda^{-1} \mathbf{r}_j)^2] + \sum_k^M [-\hbar^2 / 2m (\partial / \partial \lambda^{-1} \mathbf{R}_k)^2] \\ + \sum_j^N \sum_k^N [ee / 8\pi \epsilon |\lambda^{-1} \mathbf{r}_j - \lambda^{-1} \mathbf{r}_k|] + \sum_j^M \sum_k^M [qq / 8\pi \epsilon |\lambda^{-1} \mathbf{R}_j - \lambda^{-1} \mathbf{R}_k|] \\ + \sum_j^N \sum_k^M [qq / 4\pi \epsilon |\lambda^{-1} \mathbf{r}_j - \lambda^{-1} \mathbf{R}_k|]$$

$$= \langle \lambda^{-2} \rangle \{ \sum_j^N [-\hbar^2 / 2m (\partial / \partial \mathbf{r}_j)^2] + \sum_k^M [-\hbar^2 / 2m (\partial / \partial \mathbf{R}_k)^2] \} \\ + \langle \lambda \rangle \{ \sum_j^N \sum_k^N [ee / 8\pi \epsilon |\mathbf{r}_j - \mathbf{r}_k|] + \sum_j^M \sum_k^M [qq / 8\pi \epsilon |\mathbf{R}_j - \mathbf{R}_k|] \\ + \sum_j^N \sum_k^M [qq / 4\pi \epsilon |\mathbf{r}_j - \mathbf{R}_k|] \}.$$

$$H(\mathbf{r}/\lambda, \mathbf{R}/\lambda) \equiv \langle \lambda^{-2} \rangle \{ \text{free particle terms} \} + \langle \lambda \rangle \{ \text{potential terms} \} \equiv T + V.$$

(b)  $\lambda \gg 1 \rightarrow$  **{free particle terms} becomes dominant !!**

Shortening space axis= $\mathbf{r}$  by larger  $\lambda$  is equivalent to particle density increasing.

Or **charge density gradient** become rather monotonous to be zero electric field.

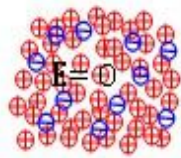
**Higher, but constant Charge Density** field can cause **lowering potential barrier**.

Free particle-nization is source of reactions by wave packet expanding.

This is a veridity for enabling **room temperature nuclear fusion** on Pt **catalyzer**

This is a cause of **Coulomb Implosion** making **pseudo higher temperature** in Brown gas.

☞ : In macroscopic view, **charge is neutral**, but becoming not neutral in some local.



High charge density with monotonous distribution ( $\text{grad } \rho \sim 0$ ) causes less weak electrical field. =  $\mathbf{E}$

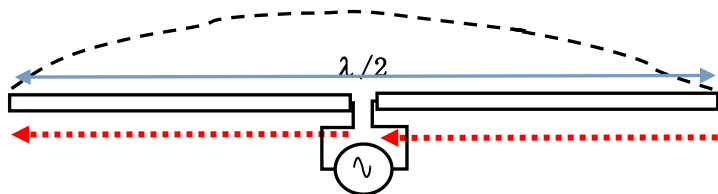
$$\square \Phi = -\rho / \epsilon \rightarrow \square \mathbf{E} = \text{grad } \rho / \epsilon = 0 \rightarrow \mathbf{E} = 0$$

This is a cause of making free particle by **CDW** (charge density wave)..

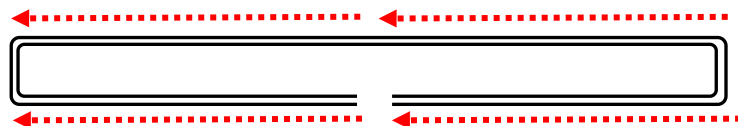
(c)  $\lambda \ll 1 \rightarrow$  **{potential terms} becomes dominant !!**

This is equivalent to cause lowering temperature to be stable solid.

③半波長ダイポールアンテナ.

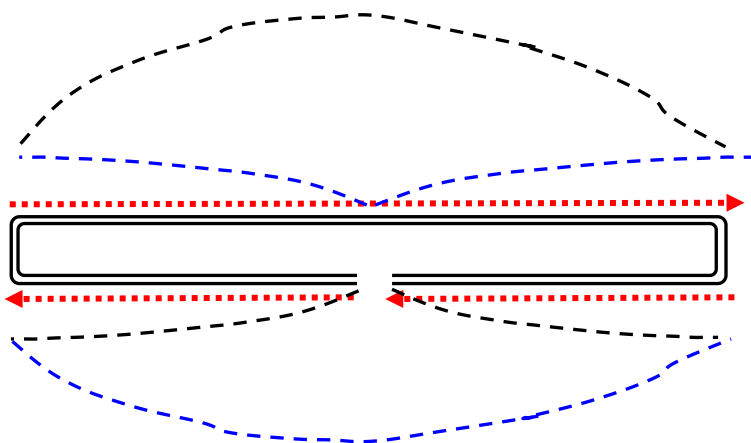


(a)折り返し半波長ダイポールアンテナ.



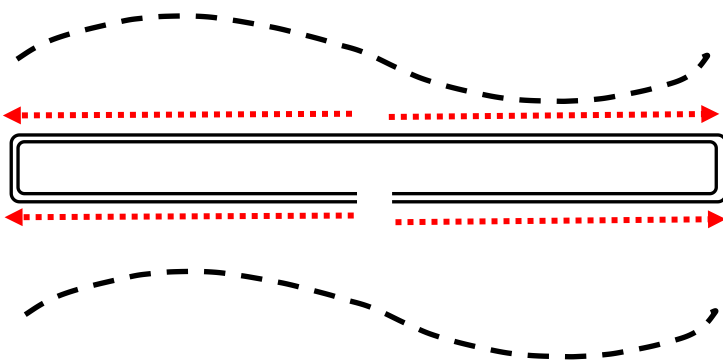
上下ダイポールで電流が逆向きになるの放射電磁界強度は2倍になる。

(b)折り返し1/4波長ダイポールアンテナ.



電流的には1/2波長なので整合する、が放射電磁界は左右先端部で逆位相で利得は減るが中央部では無害化してる。使用不可能ではない。

(c)折り返し全波長ダイポールアンテナ.



左右電磁界極性逆転だから遠方で相殺して、無意味な方法。

後書き：

筆者は 1995/1/15 阪神淡路大震災、2011/3/11 東北福島震災が地震兵器攻撃の認識にある。それは戦後において稀有な革新政権政治事情と密接相関にある。地震兵器は政治脅迫装置であり重大犯罪!!!。立証には定性的議論を超えて定量証明が求められる。今回は短時間宿泊先作業で未完成、当局と識者関係者の強力支援をお願いします。

2018/04/11 鈴木基司